

# キリシタン瓦の基礎的考察

伊藤 敬太郎\*

## 1. はじめに - 花十字文軒丸瓦との出会い -

キリシタン瓦との出会いは、2002～2003年に実施された長崎奉行所跡（現在の長崎歴史文化博物館）の発掘調査に参加した時だった（長崎県 2004・2005）。調査主体は長崎県教育委員会であったが、民間調査組織が支援として導入され、著者も調査員として参加することになった。当時、奈文研から国際航業株式会社（現国際文化財株式会社）に移ってから3年ほどしか経っておらず、前職で古代瓦の勉強をしていたことから、この機会に近世瓦（奉行所跡の瓦）について関心を深めたいと考えていた。その時に調査担当者である川口洋平氏から教えられたのが、奉行所以前、17世紀前後の当地には山のサンタ・マリア教会が存在したであろうこと、その手掛かりになる資料として、花十字文軒丸瓦があるということであった。奉行所跡から南に約100m離れた勝山町遺跡の調査（2000～2001年）では85点もの花十字文軒丸瓦が出土し、サント・ドミンゴ教会跡であることが特定されていた（長崎市 2003）。奉行所の調査では具体的な教会遺構には恵まれなかったが、5点の花十字文軒丸瓦が出土した。これが、文様の意味が極めて限定されるキリスト教の瓦との出会いであった。その後、文様は異なるが同じ十字架文の瓦が福岡や熊本から出土していることを知った。本論考では、キリシタン遺物のひとつである十字架文の瓦を集成するとともに製作技法を中心として基礎的な考察を試みるものである。

## 2. キリシタン考古学とキリシタン瓦

キリシタン考古学や遺物の定義は、今野春樹氏の『キリシタン考古学』で簡潔にまとめられている。今野氏は、まず、「『キリスト教考古学』が地球規模のキリスト教文化を対象とするのに対して、『キリシタン考古学』は日本国内での事象に限定して使用」とする（今野 2013・7頁）。さらに、キリシタン考古学とは「日本におけるキ



図1 九州とキリシタン瓦の出土位置

リスト教文化の痕跡を考古学的手法に基づいて研究する分野」（今野 2013・8頁）、キリシタン遺物とは「キリスト教の祭具や信仰の実践に用いる物」（今野 2013・9頁）、具体的には、瓦、十字架、メダイ、ロザリオ、祭具、墓碑、木棺、鐘などがあるとされている。

上記をもとに、十字架を文様とする瓦（軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦）をキリシタン瓦と呼ぶ。資料を確認できた地域は、九州（図1・長崎県、福岡県、熊本県、鹿児島県）のみ、時代は、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。先行研究は、長崎の花十字文軒丸瓦では、宮下雅史氏、山崎信二氏、川口洋平氏の論考がある。宮下氏は7種に分類するとともに長崎市街での分布状況から会派に関係なくキリスト教のシンボルマークとして花十字を使用した可能性があること、福岡や熊本のキリシタン瓦とは文様が異なることから場所によって多様であり地域性があることも指摘されている（宮下 2003）。また、最近の論考で改めて資料集成を行うとともに、外縁を打ち欠き十字架文のみとするものや、十字架文を削り取る二次加工

\* 国際文化財株式会社

表1 矢部城跡の沿革

西暦	年号	事項
中世末期		阿蘇氏により築城（詳細不明）
1588 ～ 1600 年	天正 16 ～ 慶長 5	小西行長の領国 城代 結城弥平治
1589 年	天正 17	ファンカン・レアン修道士の来訪
1593 年	文録 2	クリストヴァン・モレイラ師の来訪
1599 年	慶長 4	「修道院」の再建、「司祭館」、「教会」の建設
1600 年～	慶長 5	熊本藩（加藤清正）の支城
1612 年	慶長 17	廃城

品について言及している（宮下 2018）。

山崎氏は 8 種に分類するとともに出土位置から各教会あるいは会派で使用された瓦について推定を行っている（山崎 2015）。川口氏は、岬の教会（サン・パウロ教会）で使用されたであろう瓦について検討している（川口 2015）。熊本の十字架文軒丸瓦は、美濃口紀子氏の論考があり、同時期の李朝系瓦との関係について文様系譜上、まったく別であることを指摘されている（美濃口 1998）。一方、各地域の資料について技法を含めて相互に比較検討した研究は、管見の限りでは認められない。なお、文末にキリシタン史を簡単に年表としてまとめた（表 4）。松田毅一氏（松田 1969）による時期区分によれば、第 1 期（布教公認時代 1549 ～ 1587 年 [天文 18 ～ 天正 15]）、1549 年（天文 18）のフランシスコ・ザビエルによる布教開始から、1587 年（天正 15）の伴天連追放令まで、第 2 期（布教黙認時代 1587 ～ 1614 年 [天正 15 ～ 慶長 19]）、1614 年（慶長 19）の伴天連の国外追放まで、第 3 期（禁教・迫害時代 1614 ～ 1640 年 [慶長 19 ～ 寛永 17]）、1639 年（寛永 16）のポルトガル船の来航禁止、1641 年（寛永 18）のオランダ商館の出島への移設までに区分される（以後、4・5 期があるが省略）。信仰の広がりについては、信者の数は諸説があるため、イエズス

会の宣教師数で確認してみると、1580 年（天正 8）が 65 名、1590 年（天正 18）が 140 名、1610 年（慶長 15）が 138 名である（高瀬 1993・287 頁）。第 2 期の布教黙認時代に隆盛を極めたといえる。

### 3. 各地域の資料

#### 3-1. 矢部城跡（図 2，熊本県山都町）

阿蘇山の南外輪山の南麓で白糸台地の南端、標高 450 m 前後に位置する。範囲は、南北約 600 m、東西約 550 m で、空堀、石垣があり、複数の曲輪が認められる。発掘調査は未実施で、石垣や地形測量調査が 2006 ～ 2012 年に実施され、今までに採集された瓦も報告されている（山都町 2012）。

#### 沿革

表 1 のとおりだが、1588 ～ 1600 年（天正 16 ～ 慶長 5）まではキリシタン大名である小西行長の領国になり、キリシタン武将である結城弥平治が城代を務めた。関ヶ原の戦い以降、加藤清正の支配となり 1612 年（慶長 17）に廃城となっている。以下、『国史大辞典』に悲運のキリシタン武将として紹介された結城弥平治について詳しく触れておく（五野井 1993・268 頁）。

#### 結城弥平治 洗礼名ジョルジ 1544 ～ ? 年（天文 13 ～ ?）

河内岡山城の家老、1564 年（永禄 7）に受洗。京都の南蛮寺の造営に参加。高山右近に仕え、右近改易後は、小西行長のもとで矢部城代、1602 年（慶長 7）、有馬晴信に招かれ金山城主（長崎県雲仙市）。晴信死後の 1613 年（慶長 18）、長崎へ追放。以後の消息は不明である。

#### 宣教師の記録

フロイスの『日本史』には 1589 年（天正 17）、修道士、1593 年（文録 2）、司祭の訪問が記録されている（フロイス 1978a・313 頁，フロイス 1978 b・330 頁）。結城弥平治は司祭の常駐を願っており「1599 年～ 1601 年日本諸国記」によれば 1599 年（慶長 4）には司祭、修道士が常駐するようになり、「修道院」の再建、「司祭館」、「教会」の建設がなされた（松田 1988a・197 ～ 205 頁）。

#### 表採瓦

光背付十字架文軒丸瓦 5 点（うち 2 点所在不明）、巴

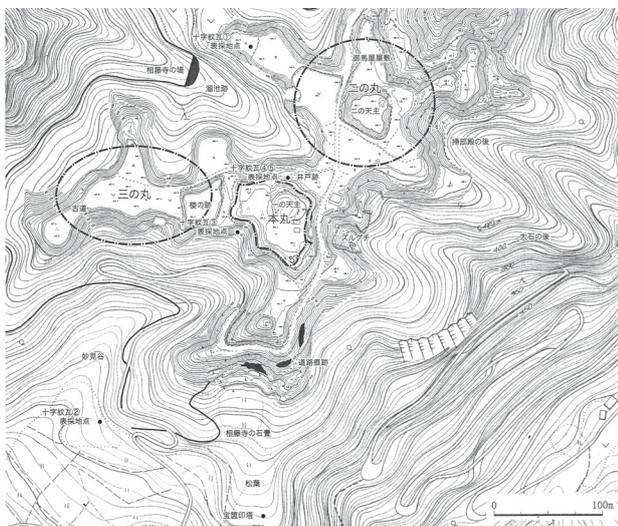


図 2 矢部城跡の地形測量 (1/7,000)

(山都町 2012 図 10 を転載)

表2 久留米城跡の沿革

西暦	年号	事項
1587年	天正15	豊臣秀吉の九州国分により毛利秀包が筑後3郡を支配（～1600年まで）久留米城を築城
1600年	慶長5	レジデンシヤ（司祭館）、聖堂の新築 関ヶ原の戦いで敗北。領地没収。田中吉政が入国、筑後一国を支配（柳川藩）
1620年	元和6	有馬豊氏が入部、久留米藩21万石が成立 以後、幕末まで有馬家の支配

文軒丸瓦2点、コピキAの丸瓦2点である。これら3種の瓦の共存関係は表採資料のため明らかでない。

**光背付十字架文軒丸瓦（写真1）**

文様は、イエズス会の紋章をモチーフとしており、十字架文の端部は、三日月状あるいは半円状になる。十字架文の周りに波状と直線状で表現した光背を配する。同じような文様は、16世紀末に天草や長崎で出版されたキリシタン版の信心書の表紙にも認められる（図9）。中房径が5.5cm前後と5cm前後のものがあり、二つの範があると考えられる。丸瓦部は残っていない。瓦当裏面にはタテ方向のカキヤブリがあり、外周を強めにナデる。

表採地点は、主郭に対面する位置にあたり、主郭に隣接して教会などの建物が存在した可能性が指摘されている。

**3-2. 久留米城下町両替町遺跡（福岡県久留米市）**

近世の久留米の変遷は表2のとおりだが、1587～1600年（天正15～慶長5）まではキリシタン大名である毛利秀包が領国を支配した。以下に毛利秀包について詳しく触れておく。

**毛利秀包 洗礼名シモン・フィンダナオ**

**1567～1601年（永禄10～慶長6）**

毛利元就の九男。妻は大友宗麟の娘（マセンシア）で、キリシタン。小早川隆景の養子、小早川元総を名乗る。秀吉より秀をもらい小早川秀包となる。1587年（天正15）の九州国分により筑後を支配した小早川隆景より筑後3郡を分け与えられる（～1600年〔慶長5〕まで）。久留米城を築城。文禄・慶長の役に出兵する。関ヶ原の戦いで敗北後、もとの毛利姓を名乗る。長門国にて死去している。

**宣教師の記録**

「1600年度イエズス会年報」にレジデンシア（司祭館）の設立、さらには「神父のための住院と聖堂とを新しく建てさせた」、「フィンダナオが城のそばに建てた教会堂のほか、町のキリシタンなどがもう一つ建てた」とある（久留米市1992・657～658頁）。

**両替町遺跡（図3）**

1991～1992年、市役所建設に伴う発掘調査（4500㎡）が実施され、池状遺構から十字架文軒平瓦6点が出土している（久留米市1996）。遺構の平面形は長方形で幅約4m、東西14m以上、深さは1～1.8m。瓦以外に、16世紀末～17世紀初頭の陶磁器（唐津、明青花磁



写真1 光背付十字架文軒丸瓦  
（山都町教育委員会蔵・著者撮影）

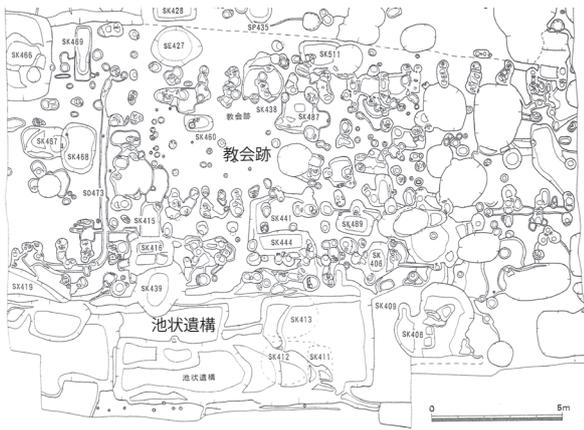


図3 教会跡・池状遺構の遺構図 (1/300)  
(久留米市 1996 図 50 を転載)

器)が出土している。その他、池状遺構の直ぐ北に教会跡の可能性のある東西棟建物が確認された。東西方向に4列の柱穴が並び、西端部では6基の柱穴が確認され回廊等が想定されている。南北幅8.25～8.50m、東西幅17.7mである。

#### 十字架文軒平瓦 (写真2)

文様は、中心が十字架文(横木が中心より上にあるラテン式)、脇は下向きに2反転、上向きに1反転の唐草文。ハナレ砂痕が残る。技法は、瓦当部の凹面側の中央部を中心に幅広の面取り(1.5～2cm)、顎部は貼付け、顎部裏面は強めにナデつける。平瓦部の凹面側は、丁寧なナデもしくはミガキ。凸面側は、ハナレ砂痕が残る。池状遺構からは、その他、変形沢渦文(毛利家の家紋)の鬼瓦が出土。軒丸瓦、丸・平瓦の状況は不明である。

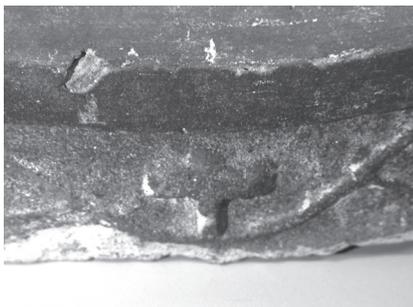


写真2 十字架文軒平瓦  
(久留米市教育委員会所蔵・著者撮影)

### 3-3. 秋月城跡 (福岡県朝倉市)

秋月は、中世以来、大宰府の府官大蔵氏の一族という秋月氏が支配する地域で、豊臣秀吉の九州国分の後、領地は小早川隆景、関ヶ原の戦いの後、黒田家へと支配が変遷する。その沿革とキリシタン関係の事項を表3にまとめた。

秋月のキリシタン信仰は、秋月種実(1569～1587年[永禄12～天正15])と、黒田直之(1600～1609年[慶長5～慶長14])の時代に盛んであった。以下、秋月種実と黒田直之について詳しく触れておく。

#### 秋月種実 1545～1596年(天文14～慶長元)

秋月氏を再興し、毛利氏の九州侵攻に協力する。その後、大友氏側になり、豊前や筑後にも勢力を広げる。1578年[天正6]、島津氏が大友氏に日向耳川の合戦で勝利すると、以後、島津氏の太刀攻撃に参加。1587年[天正15]、豊臣秀吉の九州侵攻により降伏し、日向高鍋藩へ移封。キリシタンではないが宣教師や布教に対しては好意的な対応をした。

#### 黒田直之 洗礼名ミゲル

1564～1609年(永禄7～慶長14)

黒田孝高(官兵衛[洗礼名ドン・シメオン])の弟、福岡藩主、黒田長政の叔父。秋月12000石を分知される。

#### 宣教師の記録

宣教師や教会などの施設に関する事項を箇条書きに示しておく。なお、出典はすべて『秋月のキリシタン』(チースリク2000)からである。

表3 秋月城跡の沿革

西暦	年号	事項
1557年	弘治3	大友氏により一度滅亡するも、秋月種実により再興
1569年	永禄12	ルイス・デ・アルメイダ修道士による宣教
1582年	天正10	最初の教会の設立
1587年	天正15	豊臣秀吉の九州国分により秋月種実は日向国高鍋に移封 その後、筑前・筑後に小早川隆景（熱心な仏教徒）が入部
1600年	慶長5	福岡藩が成立 秋月12000石は黒田長政の叔父黒田直之が支配
1604年	慶長9	レジデンシア（司祭館）の設置 （ガブリエル・デ・マトス神父、日本人修道士ジョアン・ヤマが赴任）
1607年	慶長12	聖堂の新築
1609年	慶長14	黒田直之没
1623年	元和9	黒田長興に秋月5万石を分知して立藩

・1569年（永禄12）ルイス・デ・アルメイダ修道士による秋月への宣教

「領主（秋月種実）は私を饗応し、多くの名誉のしるしを示した。デウスの教えを聴こうと欲する者も数人あったので、私は約十日間この地に留まり、二十四人に洗礼を授けてから豊後に向けて出発した。」（「1570年イエズス会員宛書簡」22・23頁）

・1582年（天正10）最初の教会の設立

「領主は日本の宗旨の有力な信者（中略）領内にイエズス会の人々が数人滞在することを望む旨、言明した」、「殿は教会を城の下に築くことを望み、親戚の一人が所有する甚だよい地所を与えた」（フロイス1582年度報告41・42頁）

・1604年（慶長9）レジデンシアの設立

「この年に秋月のレジデンシア（司祭館）が始まり、最初の担当者はガブリエル・デ・マトス神父と修道士ヤマ・ジョアンであった」（マトス神父「回想録」94頁）

・1607年（慶長12）聖堂の新築

「秋月の聖堂が移築された。それは私たちのために必要な住院および諸施設のため、便利でもっと広い、別の地所にできた。今までの聖堂は小さく、きれいに作られていたとは言えるものの、地元の人たちをやっと収容できるだけであった。新築は惣右衛門殿ミゲルがその費用を

負担し、これに信者たちもその寄附を合わせ、特に神父の家のために協力した。」（「1607年度イエズス会日本年報」226頁）

なお、長らく秋月教会の主任神父であったマトス神父の略歴は以下の通りである。

ガブリエル・デ・マトス神父

1571～1634年（元亀2～寛永11）

1604～1609年（慶長9～慶長14）まで秋月教会の主任。ポルトガル生まれ。1588年（天正16）、イエズス会入会。1600年（慶長5）、入国（長崎?）、1602年（慶長7）、長崎のトードス・オス・サントスの修練院の監事。1604年（慶長9）、秋月のレジデンシアに着任。1609年（慶長14）、有馬のセミナリオへ転任。1614年（慶長19）、国外へ退去した。

罪標付十字架文軒丸瓦（写真3）

秋月城跡に位置する秋月中学校の改築に伴い出土。1点のみが確認されている。

十字架は、干状である。イエスを十字架にかけた時、ローマのユダヤ総督ピラトが、罪状（ナザレのイエス、ユダヤ人の王）を横木に書きつけたとされており、その様子を模した文様である。基部にはカルワリオ（イエス・キリストが十字架にかけられた丘）を表現している。

十字架文の周囲には圏線があり、さらに珠文が巡る。



写真3 罪標付十字架文軒丸瓦  
（朝倉市秋月博物館所蔵・著者撮影）

瓦当面には範の痛みによるものか、木目が浮き出ている。丸瓦部は残存しないが、接合に伴うカキヤブリが認められる。

### 3-4. 長崎遺跡群 (図4, 長崎県長崎市)

近世の長崎は、大村領主の大村純忠によって1570年(元亀元)に開港し、1580年(天正8)にはイエズス会に寄進された(表4)。最初の教会は、1569年(永禄12)、ガスパル・ヴィレイラ師によりトードス・オス・サントス(諸聖人)教会が開かれている。その後、1588年(天正16)、豊臣秀吉による長崎の直轄領化、1597年(慶長元)、二十六聖人の殉教などもあったが、イエズス会だけでなく、ドミニコ会やフランシスコ会の宣教師も来日し布教にあたった。1614年(慶長19)の伴天連追放、教会の破壊時には少なくとも11か所の教会が存在した。この時に破壊を免れたトードス・オス・サントス教会、ミゼリコルディアの家も1620年(元和6)には破壊された。これらの教会は江戸時代から断片的に記録に留められた。例えば1767年(明和4)の『長崎実録大成』には「切支丹寺焼捨之事」として、「立山御役所境内ニ一ヶ所」、「勝山町ニ一ヶ所」などの記載がある。昭和になり、古賀十二郎『長崎志正編附考』(1928年)や、パチェコ・ディエゴ「長崎の教会—1567年～1620年—」(1975年)などにおいて、宣教師側の記録を含めた総合的な検

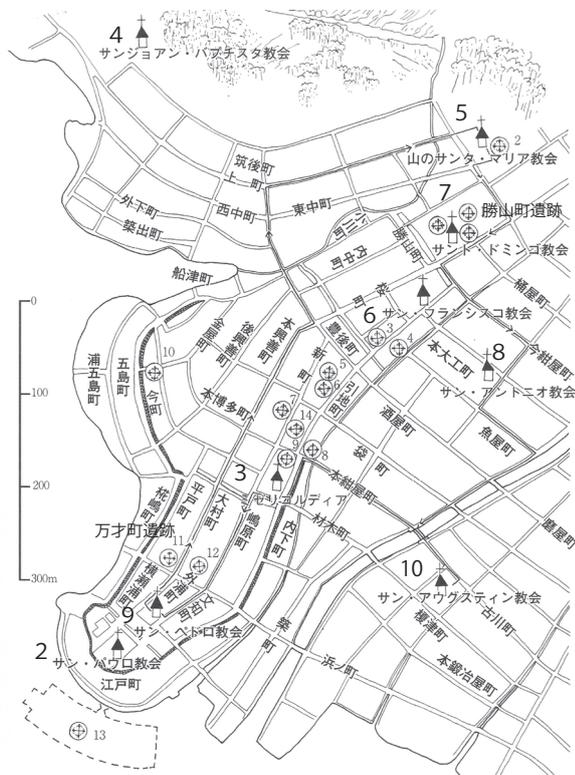


図4 長崎の教会の所在地  
(山崎 2015 図14 を一部改変)

討から、教会名や所在の特定が進んだ(山崎 2015)。

以下、教会ごとの設立年、建物に関する記事、会派、所在地などを箇条書きで示しておく。

#### 1) トードス・オス・サントス(諸聖人)教会

(会派:イエズス会、所在地:春徳寺)

- ・1569年(永禄12)に創建。

#### 2) 被昇天の聖母(サン・パウロ)教会 岬の教会

(会派:イエズス会、所在地:長崎奉行所西役所)

- ・1571年(元亀2)に小聖堂を創建。
- ・1580～1581年(天正8～天正9)に教会を建築。
- ・～1585年(天正13)、この頃までに、2、3度の増築、新たな教会の建築を決定。
- ・1588年(天正16)、日本で有したこともないほど大きくすばらしい教会。
- ・1591年(天正19)、教会を破壊し、材木は名護屋城。
- ・1592年(天正20)、ポルトガル人のために再建。
- ・1601～1602年(慶長6～慶長7)、非常に大きな教会で三層に主聖堂が造られた。

#### 3) ミゼリコルディアの家及び附属教会

(会派:イエズス会、所在:本博多町)

- ・1583年(天正11)にミゼリコルディア(慈悲の組)を設立。

#### 4) 聖ラザロ病院 サンジョアン・バプチスタ教会

(ミゼリコルディアが運営、所在:本蓮寺)

- ・1591年(天正19)に創建。

#### 5) 山のサンタ・マリア教会

(信者[ポルトガル人]の寄付、所在:長崎奉行所東役所)

- ・1594年(文禄3)以前に創建。

#### 6) サン・フランシスコ教会

(会派:フランシスコ会、所在:桜町)

- ・1608年(慶長13)に創建。

#### 7) サント・ドミンゴ教会

(会派:ドミニコ会、所在:勝山町)

- ・1609年(慶長14)に創建。薩摩にあった教会を解体して移設。教会堂、修道院、墓地が存在した。中庭には殉教者レオン税所七右衛門の遺体を安置し、十字架が立っていた。

#### 8) サン・アントニオ教会

(村山等安の寄付、所在:本大工町)

- ・1612年(慶長17)に創建。

#### 9) サン・ペドロ教会(村山等安の寄付、所在:外浦町)

- ・1611年(慶長16)に創建。

#### 10) サン・アウグスティン教会

(会派:アウグスチノ会、所在:本古川町)

- ・1612年(慶長17)に創建。

## 11) サン・ティアゴ病院と教会

(会派：イエズス会、所在：酒屋町)

・1603年（慶長8）に創建。

### 出土事例

花十字文軒丸瓦は、長崎市内16ヶ所から123点（軒丸瓦122点、鬼瓦1点）が出土している。出土した遺跡としては勝山町遺跡（サント・ドミンゴ教会跡）が85点ともっとも多い。その他の遺跡では10点未満の出土である。市外では、三城城下跡（長崎県大村市）1点、原城跡（長崎県南島原市）4点、長崎県諫早市1点、鹿児島城（鹿児島県鹿児島市）4点ですべて軒丸瓦である。総計は133点になる（宮下2018）。なお、鹿児島城二之丸から出土した資料は、山崎信二氏によれば、島津藩主の姑であるカタリーナ永俊尼と関係があり、長崎から持ち込まれた可能性が指摘されている（山崎2015）。

### 分類（図5）

宮下雅史氏、山崎信二氏により分類案が示されている。ここでは、宮下分類を用いる（宮下2003、山崎2015）。

宮下分類は、まず、圏線があるものをⅠ類、ないものをⅡ類に大別する。さらに花十字の形状からA～D類に細分し、さらにⅡ類については、花卉の間の珠文数から2～5類としている。点数としては、ⅡB3類が72点ともっとも多く、以下、ⅡB4類が27点、ⅡB5類が13点である。

### 代表的な事例

教会との関係が伺える二つの事例を紹介する。

#### 万才町遺跡（写真4、町屋跡）

1993年、長崎県庁新別館建築に伴い調査（620㎡）が実施された（長崎県1995）。調査地の南200mに被昇天の聖母（サン・パウロ）教会の推定地が所在する。

調査の結果、4～5枚の整地層や火災層により1571年（元亀2）の町建てから幕末まで5期の区分が可能で各面で町屋跡が確認された。

花十字文軒丸瓦は、Ⅱ-1期（1601～1610年代、1601年〔慶長6〕の火災層以降で初期伊万里を含まない時期）の土坑（SK128）から出土した。花卉は肉厚で、ⅠA類に分類される。花卉の周りには圏線が認められる。丸瓦部は残存しないが、瓦当裏面には丸瓦先端のキザミ目が凸状になり残る。

圏線があるのはこのタイプのみであることから、花十字文軒丸瓦のなかではもっとも古い瓦に位置づけられている。

その他、軒丸瓦では、橘文、輪宝文、三巴文、軒平瓦では上向三葉文が確認されている。コビキが分かるものはすべてコビキBである。

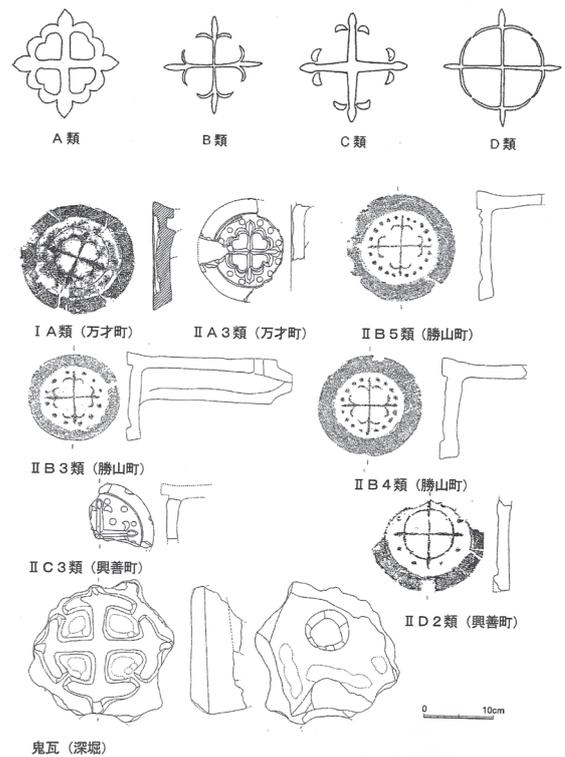


図5 花十字文軒丸瓦の分類

（宮下2018第2図を転載）



写真4 花十字文軒丸瓦

（長崎県埋蔵文化財センター所蔵・著者撮影）

位置関係から、被昇天の聖母（サン・パウロ）教会に伴い、かつ、1601～1602年（慶長6～慶長7）、建築の非常に大きく、実に壮麗な三層の主聖堂と記録された教会建物（松田1988b・85頁）との関係が指摘されている

(山崎 2015)。

#### 勝山町遺跡 (図 6、写真 5、サント・ドミンゴ教会跡)

2000～2001年、小学校建替に伴い調査(5000㎡)が実施された(長崎市 2003)。勝山町には、1609年(慶長14)に創建され、1614年に破壊されたドミニコ会の教会が所在していた。調査の結果、16世紀初頭の石敷や排水溝、多数の花十字文軒丸瓦が出土したことにより、サント・ドミンゴ教会跡と考えられている。なお、破壊後は、長崎代官(末次家→高木家)の屋敷となっており、

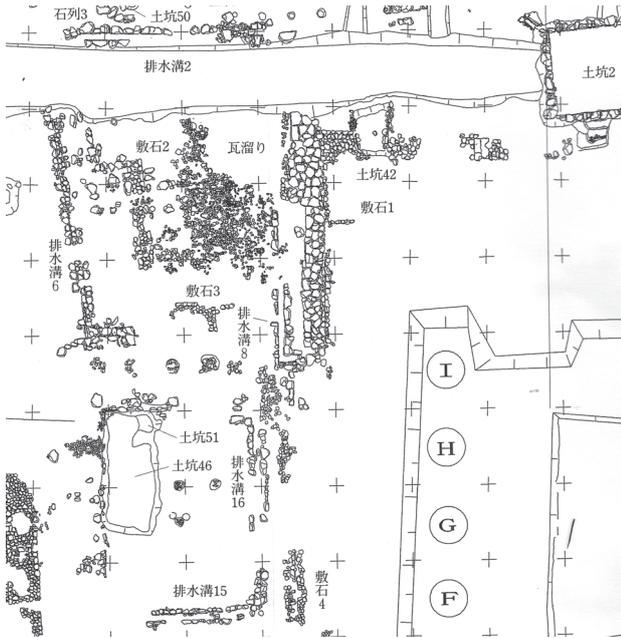


図 6 勝山町遺跡遺構図 (1/400)  
(長崎市 2003 付図を転載)

遺構・遺物が確認されている。調査終了後、遺構の一部は保存されサント・ドミンゴ教会跡資料館として保存・公開されている。

花十字文軒丸瓦はⅡB3類が58点、ⅡB4類が7点、ⅡB5類が9点、不明11点の計85点である。技法はコビキBで裏面の外周を強くナデる。共伴する瓦として三巴文軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦がある。軒平瓦は1種である。中心飾に十字架文は認められず上向きの三葉文で、唐草は2反転する。全長が分かる資料は、軒丸瓦(ⅡB3) 24.6cm、軒平瓦 22.5cm、丸瓦 23.6cmと24.8cm、平瓦 22.8cmであり、全体的に小ぶりの瓦であることが分かる。

#### 4. キリシタン瓦の特徴

4地域の事例を紹介してきた。まとめてみると以下のとおりである。

時期は、16世紀末葉から17世紀初頭に限定される。

さらに細かくみると、キリシタン大名や武将による領地支配の関係で、豊臣秀吉の九州国分から関ヶ原の戦いまでに限定される資料が矢部城跡、久留米城下両替町遺跡である。宣教師の記録にある教会などの建築との関係でみるなら、矢部城跡は1599年(慶長4)、久留米は1600年(慶長5)、これらが瓦の具体的な年代の候補となる。

秋月城跡は、黒田直之の支配期間1600～1609年(慶長5～慶長14)、具体的には1604年(慶長9)のレジデンス設立、あるいは1607年(慶長12)、聖堂の新築

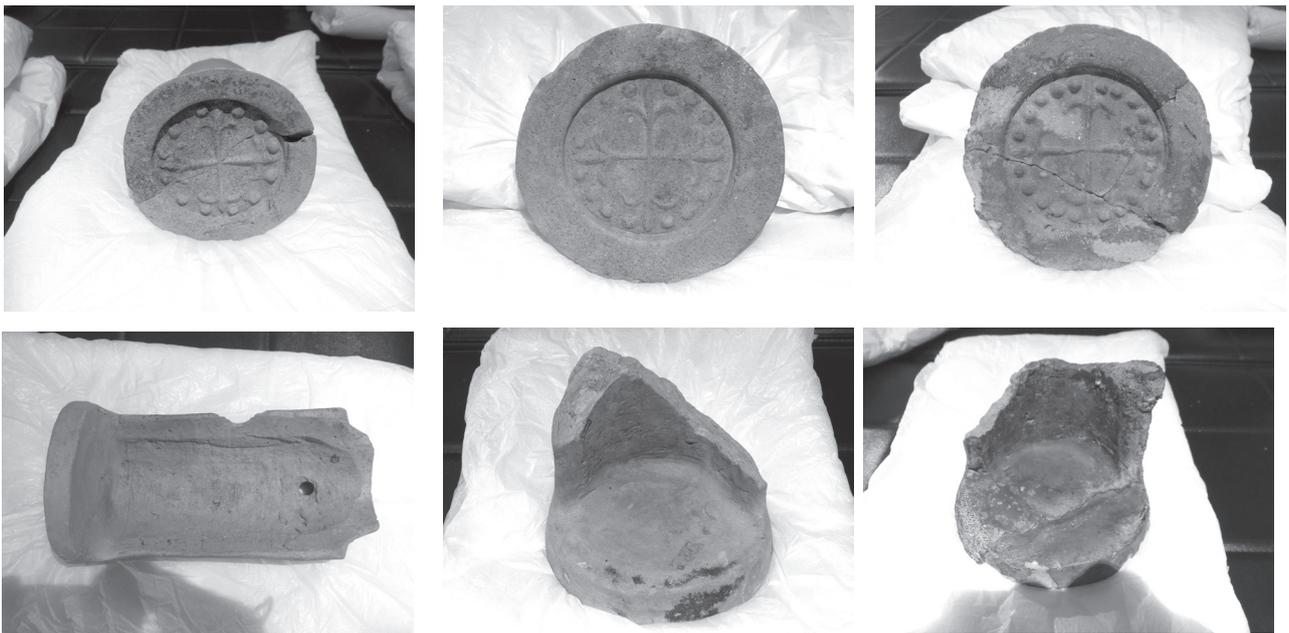


写真 5 勝山町遺跡 花十字文軒丸瓦  
(長崎市サント・ドミンゴ教会跡資料館所蔵・著者撮影)

の年が候補となる。長崎は、17世紀初頭から1614年（慶長19）までと考えられる。

地域は、福岡、長崎、熊本の西北九州に限定される。

文様について矢部城跡は光背付十字架文、久留米はラテン式十字架文、秋月城跡は罪標付十字架文、長崎は花十字文であり、地域ごとに異なる。

技法について軒丸瓦は接合式で裏面の外周を強くナデるものがある。軒平瓦では頸部は貼付け、瓦当部の凹面側に幅広の面取りが認められる。いずれも一般的な近世瓦と同じ特徴である。この時期、当地に流入した李朝あるいは李朝系瓦にみられる軒丸瓦の瓦当裏面の布目痕や、丸・平瓦部の取り付けが鈍角になるような特徴は認められなかった。

日本の技法で作られた近世瓦に十字架の文様を取り入れられたといえる。

それぞれが近接しあう時期、隣接する地域であるにもかかわらず、地域ごとに文様が異なる背景について、次に同じ十字架文を採用する墓碑と比較検討してみたい。

### 5. キリシタン墓碑と瓦の文様について

2012年に刊行された『キリシタン墓碑総覧』では全国192基、関連石造物10基の実測図・写真・拓本が集成されている（大石編2012）。この成果に導かれながら、瓦と墓碑の文様について比較検討してみたい。

キリシタン墓碑の所在地は長崎県146基（76%、かつ131基は島原半島）、京都市20基（10%）、熊本県14基（7%）、大阪府8基（4%）、大分県4基（2%）である。大多数が長崎、それも島原半島で確認されている。形状は、立碑状、伏碑状に大きく2分され、さらに立碑では、尖頭形、円頭形など、伏碑では柱状、板状などと多様である。

次に年代だが、紀年銘墓碑からみると1581年（天正9）・1582年（天正10）銘のものをもっとも古く大阪で見られる。どちらも立碑状である。それ以降は、1601～1622年（慶長6～元和8）までに集中している。長崎（図7-1～6）では、1604年（慶長9）・1605年（慶長10）・1610年（慶長15）・1614年（慶長19）などのものがあり、形状は西欧に系譜が求められる伏碑状である。紀年銘墓碑の動向からは、キリシタン墓碑は1601～1614年（慶長6～慶長19）に最盛期を迎えたと考えられている。

また、文様について森脇あけみ氏によれば、十字架文は横木が中心より上にあるラテン十字（I類 34例）、正十字であるギリシア十字（II類 42例）に大きく2分される。さらに基部のカルワリオ、十字端部の装飾の有無（花十字など）、I類では干十字かどうかなどで細

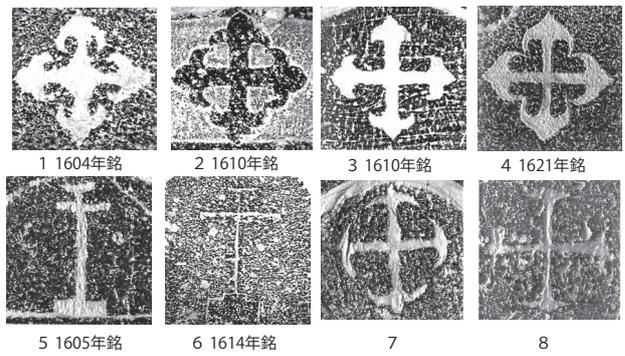


図7 キリシタン墓碑の十字架文  
（森脇2012表6を一部転載）

		十字架末端の装飾					
		1 装飾を持たないもの	2 二方向に分かれる		3 三方向に分かれる		4 クマビ状に尖るもの
			a 水平方向に分かれるもの	b 珠文がつくもの	a 花卉状になるもの	b 頂点が珠文となるもの	
I ラテン十字	A	肥後1 都1					
	B	有馬1 豊後2			佐賀1		
	C	大坂1 IHS		大坂1			
	D	有馬4 大村2+(1) 肥後1 大坂2					
	E	有馬7 大村1+(1) 豊後2					
	F	肥後2 都1 IHS	都2				
II ギリシア十字	A	豊後1	有馬1 大坂4 都3		有馬14 大村2+(1) 長崎1 豊後1 肥後2 都5	都3 都1	
	B				有馬1		
	C		都2				
その他						豊後1	

( )内の数字は「INRI」記録があるもの

図8 キリシタン墓碑の十字架文分類  
（森脇2012表4を転載）

分される。全体でI類が9種、II類が7種に分類でき、かなりバリエーションが豊富であることが確認されている（図8）。

地域ごとにみると、長崎では花十字文（図7-1～4）が19例、干十字（図7-5・6）が16例あり、一概にすべてが花十字であったとはいえない。また、花十字文は、長崎以外では、熊本（図7-7・8）や大分、京都でも認められるが花卉の形状が長崎のものとは異なる。

長崎の花十字文は、画家で宣教師であるジョバンニ・ニコラオとの関係が指摘されている（結城1980）。ニコラオは、1583年（天正11）に来日した。天草の志岐や有馬、長崎の画学舎で日本人に祭壇画などの教会絵画を指導し

ている。文様の創出にあたって、ニコラオは、自身のサインの最後にキリストの顔と光背に花文を描いていたことや、キリシタン版などでみられる十字の先端が花卉状になる文様をベースに、ニコラオあるいは、日本人の画工たちの間で、花卉をより強調する文様として創出された可能性が指摘されている（山崎 2015）。

熊本の矢部城跡の文様は、イエズス会の紋章をモチーフにしており、キリシタン版の印刷物にも類似した文様が認められる（図 9）。また、十字架の先端部の形状が似る墓碑として、玉田市吉利支丹墓碑（図 7-7）や八代

市金立院墓碑（図 7-8）がある。

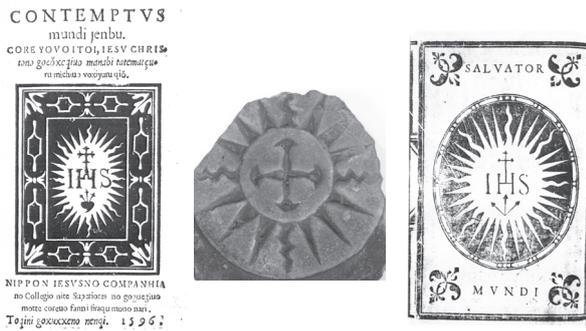
福岡ではキリシタン墓碑は確認されていないが、秋月の瓦と十字架およびカルワリオの文様が酷似する礼拝用石碑として大分県豊後大野市にある市万田磨崖十字架碑がある（図 9）。

さて、キリシタン墓碑の形状や文様が多様であることについて、存続した期間からみて、時期差よりも地域差が大きいと言われている。なぜ、地域差があるかについては統一的な見解はない。信者それぞれの自由な選択性、信者集団、会派、指導した宣教師の違いなど、様々な可能性が指摘されている。

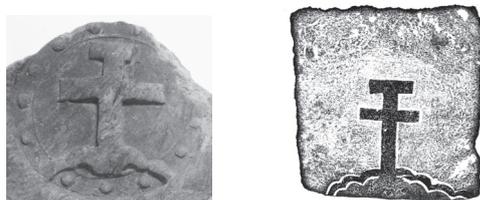
瓦の場合、長崎を除けば、すべてイエズス会に関連する遺跡である。例えば、秋月の主任神父であったマトス神父は、長崎のトードス・オス・サントスの修練院に在籍した後、秋月に赴任している。長崎で花十字文瓦の教会を実際に見ていたはずである。そのうえで、秋月に罪標付十字架文を採用したとするならば、教会などの建築を指導した宣教師が瓦の文様をそれぞれで決めていたということであろうか。これについては、より詳細な宣教師の活動実態の解明が必要になる。

次に瓦に十字架文を採用した背景だが、こちらも明快な見解は持ち合わせてないが、当時の背景として、例えば、久留米城下町では、十字架文軒平瓦が出土した池状遺構から毛利家の家紋である変形沢瀉文の鬼瓦、長崎の万才町遺跡では、花十字文軒丸瓦の出土した SK 128 からは橘文軒丸瓦、輪宝文軒丸瓦、矢部城では、本城である宇土城から、桐文飾板が出土している（図 10）。この時期は、従来までの巴文だけでなく、デザインに意味のある文様として瓦に家紋などが取り入れられていた。家紋瓦は、安土城（1576 年 [天正 4] 築城開始、1579 年 [天正 7] 完成）で桐文や菊花文を採用したのが始まりである。家紋と同じように意味のある文様として十字架文が瓦に採用されたのであろうか。実態解明の手掛かりとして、安土城と同時期に京都の南蛮寺（1575 年 [天正 3] 造営、1576 年 [天正 4] 献堂式）が造営されており、結城弥平治も造営に参加している。残念ながら、発掘調査は一部のみで遺跡の全貌や瓦の詳細は不明である。今後、南蛮寺の所用瓦を明らかにすることができれば、十字架文の瓦への取り込みについて手がかりを得ることができるかもしれない。

また、長崎では、被昇天の聖母（サン・パウロ）教会が、1588 年（天正 16）時点で「かつて我らが日本でもしたこともないほど大きくすばらしい教会を新たに我らの手で建てていた」とある（松田 1987・32 頁）。川口洋平氏は、南蛮屏風（内膳本）や同時期の九州の瓦の検討



コンテンツス・ムンデ 1596年天草 サルバトール・ムンデ 1598年長崎  
天草・長崎のキリシタン版と矢部城跡の瓦



市万田磨崖十字架碑と秋月城跡の瓦

図 9 キリシタン版、礼拝石と瓦の文様  
（天理図書館 1973 図 15・17，大石編 2012 大分 7 を転載）

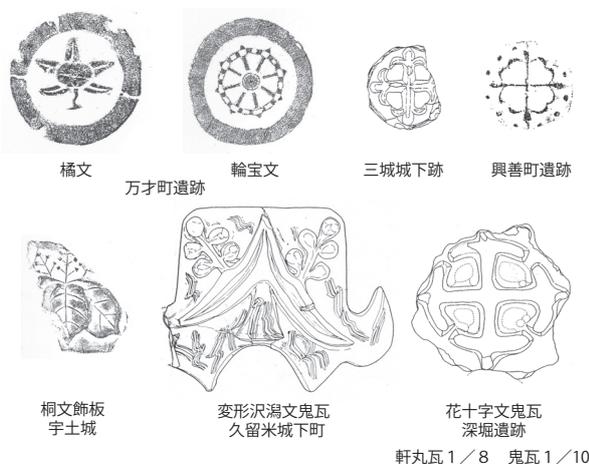


図 10 家紋瓦と打ち欠き花十字文瓦  
（久留米市 1996 図 73，山崎 2008 第 19・29 図，  
宮下 2010 図 3 を一部転載）

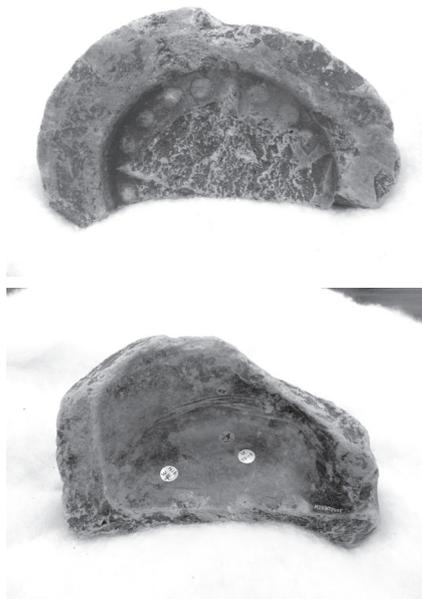


写真6 出島 花十字文軒丸瓦  
(長崎市出島復元整備室所蔵・著者撮影)

からイエズス会の紋章を採用した矢部城跡の光背付十字架文軒丸瓦と同系統の瓦が所用されたと想定している。ただし、教会の推定地で本格的な発掘調査は実施されておらず、この時期の建物が瓦葺きであるかどうかを含めて、実証的な検証が今後必要とも指摘されている(川口2015)。

当時、イエズス会などのカトリック系会派は、諸外国で積極的な布教活動を行っていた。日本以外でも瓦に十字架の文様を取り入れた事例があるかもしれない。例えば、イエズス会の東南アジアにおける重要拠点であった明国のマカオや、各会派の教会が所在したスペイン領フィリピンのマニラなどの教会の屋根がどのような形態で、その軒先に文様があるのか関心が持たれるところである。

## 6. その後の花十字文軒丸瓦

長崎では1614年(慶長19)に多くの教会が破壊された。1620年(元和6)には最後に残ったトードス・オス・サントス教会、ミゼリコルディアの家も取り壊され、花十字文軒丸瓦は、屋根先からその存在を消した。ここでは、屋根から取り除かれた後を物語るいくつかの資料を紹介する。

### 花十字文のみを残す資料(図10)

外縁を打ち欠き花十字文のみを残した資料が興善町遺跡(長崎市)、深堀遺跡(長崎市)、三城城下跡(大村市)から出土している。十字架部分のみとしていることから祭具として利用された可能性が指摘されている(宮

下2018)。

### 花十字文を削り取る資料(写真6)

花十字の文様のみを削り取るが、珠文は削っていない資料が、出島、勝山町遺跡、興善町遺跡(いずれも長崎市)から出土している。

出島と勝山町の資料は丸瓦部が残る。興善町は、瓦当の下半のみで不明である。これらの資料について宮下雅史氏は、キリシタンは花十字のモチーフに聖性を宿すものとしての意義を見出し、削り取って聖遺物として容器等に収めて所持したのではないかとする(宮下2018)。山口美由紀氏は、出島の資料について文様を削り意味を消し去ることで貴重な建材である瓦を再利用したのではないかと考えている(長崎市2008)。

出島では、8点の花十字文軒丸瓦が出土しているが、他はすべて文様が残存している。また、出土層位は築土ではなく包含層である。人工島である出島においては、外部から持ち込む以外、自然に流入したとは考え難い。持ち込まれた理由を探るためには、出島から出土する他の軒瓦を含めて総合的に検討し、建物の所用瓦を復元したうえで、再度、文様が削られた意味について考えていく必要があるだろう。

## 7. おわりに(写真7)

最後に、さらに、その後を物語る瓦を紹介する。写真は、浦上天主堂の被爆瓦である。1914年に竣工した東洋一を誇る大聖堂も1945年8月9日の原爆投下により一瞬で廃墟と化した。屋根には200余年の潜伏の時を超えて、再び花十字の文様が使われていた。

日本では、十字架の文様を瓦に取り入れることが、近世のキリシタン布教時代だけでなく、近代においても認められた。この行為が日本独自の文化であるのか、今後は、世界に視野を広げて考えていきたい。



写真7 浦上天主堂の被爆瓦  
(長崎原爆資料館所蔵・提供)

資料調査にあたっては、以下の方々の協力・助言を得ました。記して感謝します。

朝倉市秋月博物館 石井佐和子氏 熊本城調査研究センター 美濃口紀子氏 久留米市教育委員会 熊代昌之氏 長崎県埋蔵文化財センター 山梨千晶氏 長崎市文化観光部 田中学氏 長崎市出島復元整備室 田中亜貴子氏 長崎市サント・ドミンゴ教会跡資料館 山都町教育委員会 西慶喜氏 長崎原爆資料館

## 主要参考文献

- 伊藤敬太郎 2003 「近世長崎の瓦 - そのはじまりについて -」『続文化財学論集』 235-243 頁
- 伊藤敬太郎 2017 「近世長崎の瓦について」『第66回埋蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦』 189-198 頁
- 今野春樹 2013 『キリシタン考古学 - キリシタン遺跡を掘る -』(考古調査ハンドブック 8) ニューサイエンス社
- 大石一久編 2012 『キリシタン墓碑総覧』 南島原市教育委員会
- 川口洋平 2015 「南蛮屏風に描かれた瓦」『高野晋司氏追悼論文集』 265-275 頁
- 久留米市史編さん委員会編 1992 『久留米市史』第7巻(資料編)
- 久留米市教育委員会 1996 『久留米城下町両替町遺跡』(久留米市文化財調査報告書第116集)
- 古賀十二郎 1928 『長崎志正編附考』 長崎文庫刊行会
- 五野井隆史 1990 『日本キリスト教史』 吉川弘文館
- 五野井隆史 1993 「結城弥平治」『国史大辞典』14 吉川弘文館 268-269 頁
- 高瀬弘一郎 1993 「イエズス会日本管区」『岩波講座日本通史』第11巻(近世1) 岩波書店 285-300 頁
- H・チースリク 2000 『秋月のキリシタン』(キリシタン研究第37輯) 教文館
- 天理図書館 1973 『キリシタン版の研究』
- 長崎県教育委員会 1995 『万才町遺跡』
- 長崎県教育委員会 2004 『長崎奉行所(立山役所)跡・炉粕町遺跡』
- 長崎県教育委員会 2005 『長崎奉行所(立山役所)跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』
- 長崎市教育委員会 2003 『勝山町遺跡』
- 長崎市教育委員会 2008 『国指定史跡出島和蘭商館跡 第1分冊』
- 丹羽漢吉・森永種夫校訂 1973 「切支丹寺焼捨之事」『長崎実録大成正編』(長崎文献叢書第一集・第二巻) 長崎文献社 175-176 頁
- 丹羽漢吉・限行梓行校訂 1975 『長崎虫眼鏡・長崎見聞録・長崎縁起略』(長崎文献叢書第一集・第五巻) 長崎文献社
- パチェコ・ディエゴ(結城了悟) 1977 「結城城主ジョルジ結城弥平次」『九州キリシタン史研究』 53-72 頁(初出1972『長崎談叢』第58輯)
- 浜中邦弘 2015 『京南蛮寺』再考『森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』(同志社大学考古学シリーズ11) 729-739 頁
- フロイス(松田毅一・川崎桃太訳) 1978a 『日本史』5 中央公論社
- フロイス(松田毅一・川崎桃太訳) 1978b 『日本史』8 中央公論社
- 松田毅一 1969 『キリシタン 史実と美術』 淡交社
- 松田毅一監訳 1987 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期1巻 同朋舎
- 松田毅一監訳 1988a 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期3巻 同朋舎
- 松田毅一監訳 1988b 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期4巻 同朋舎
- 松田毅一監訳 1987~1998 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1~3期 同朋舎
- 美濃口紀子 1998 「熊本城出土の李朝系軒丸瓦」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会 119-146 頁
- 宮下雅史 2003 「花十字紋瓦考」『西海考古』第5号 49-62 頁
- 宮下雅史 2010 「長崎地方のキリシタン瓦」『考古学ジャーナル』600号 ニューサイエンス社 24-26 頁
- 宮下雅史 2018 「花十字紋瓦の二次加工と転用について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 49-57 頁
- 森浩一 1973 『京都市中京区姥柳町遺跡(南蛮寺跡)調査概報』(同志社大学文学部考古学調査記録2)
- 森脇あけみ 2012 「石の十字架 - 石造十字架からみたキリスト教信仰の地域様相に関する一考察」『キリシタン墓碑総覧』 南島原市教育委員会 447-490 頁
- 山崎信二 2008 「近世長崎の瓦」『近世瓦の研究』(奈良文化財研究所学報第78冊) 91-101 頁
- 山崎信二 2015 『長崎キリシタン史 附考キリスト教会の瓦』 雄山閣
- 山都町教育委員会 2012 『矢部城(愛藤寺城)測量調査報告書』(山都町文化財調査報告書第3集)
- 結城了悟 1980 「イルマン・ニコラオとサルバトル・ムンディの像」『大村史談』第18号 1-3 頁

表 4 関連年表

【布教公認時代】

西暦	年号	事項
1549年	天文18	フランシスコ・ザビエル（イエズス会士）が鹿児島に來日し布教を開始
1560年	永祿3	ピレラが足利義輝將軍から京への布教の許可
1569年	永祿12	ルイス・フロイスが織田信長から布教の許可 長崎最初の教会 トードス・オス・サントス（諸聖人）教会創建
1570年	元龜元	長崎の開港
1575年	天正3	京都 南蛮寺の造営
1580年	天正8	長崎 イエズス会に寄進 イエズス会宣教師 65名
1582年	天正10	天正少年使節派遣 本能寺の変

【布教黙認時代】

西暦	年号	事項
1587年	天正15	豊臣秀吉 九州平定 伴天連追放令
1588年	天正16	長崎を直轄領
1590年	天正18	イエズス会宣教師 140名
1591年	天正19	長崎の教会と修道院の破壊 材料は名護屋城へ
1592年	文祿元	文祿の役 ドミニコ会宣教師來日
1593年	文祿2	フランシスコ会宣教師來日
1597年	慶長元	長崎 二十六聖人の殉教
1598年	慶長3	豊臣秀吉没
1600年	慶長5	関ヶ原の合戦
1610年	慶長15	イエズス会宣教師 138名
1612年	慶長17	キリシタン禁教令
1613年	慶長18	伴天連追放文

【禁教・迫害時代】

西暦	年号	事項
1614年	慶長19	長崎の宣教師追放・教会の破壊
1620年	元和6	最後に残ったトードス・オス・サントス教会 ミゼリコルディアの家の破壊
1636年	寛永13	出島完成 ポルトガル人を居住
1637年	寛永14	天草・島原の乱
1639年	寛永16	ポルトガル船の來航禁止
1641年	寛永18	オランダ商館を平戸から出島に移す